

天草方言で詠む【百人一首】

鶴田 功〈訳文〉

はじめに

通常、小倉百人一首と称され、鎌倉時代の歌人藤原定家（京都嵯峨野の小倉山に住む）の撰歌で、上代の天智天皇から鎌倉時代の順徳院までの約六百年間、百人の歌人による最も優れた和歌を、年代順に一首ずつ選んだものです。

また、百人一首がかかるたとして遊び始められたのは戦国時代からで、お正月遊びとして一般の家庭でも行われるようになったのは、ずっと後の安政のころだといわれています。

現在では、歌集としてよりも、古典の入門書として教材に用いたり、特に正月の風物詩として人々に広く親しまれている「かるたとり」が有名です。

子どもの頃、意味も解らないまま、原文を暗記したものです。懐かしい響きが今尚心に残り、このたび「天草方言で読む 百人一首」をまとめてみました。



〔太字は原文〕

001 秋の田の刈り穂の庵の ^{いほ} 苫をあらみ ^{とま} わが衣手は ^{ころもて} 露にぬれつつ（天智天皇）
収穫の秋 田の脇につくった仮小屋で 刈り上げた稲の番をしとれば
苫の目が粗かけん 隙間から冷たか夜露が入って 着物ン袖は濡れっしもたヨ
※ 苫（スゲやアシなどを編んで作った家の囲い）

002 春すぎて 夏来にけらし ^{しろたえ} 白妙の衣ほすてふ 天の香具山（持統天皇）
春が過ぎ去り 夏が来たごたる 天の香具山にや 白か着物バほしてあるバイ
※ 「白妙の」は、「衣・袖」に掛かる枕 ^{まくらことば} 詞 ^{こうそ} 楮の繊維で織った白い布）
※ 枕 ^{まくらことば} 詞とは、主として和歌に見られる修辞で、特定の語の前に置いて語調を整えたり
情緒を添えることばのこと

003 あしびきの 山鳥の尾の しだり尾の ながながし夜を ひとりかも寝む
（柿本人麻呂）
山鳥の 垂れ下がった尾のごて 長か夜を 一人さびしく寝にゃんとじゃろかい
※ 「あしびきの」は、「山」に掛かる枕 ^{まくらことば} 詞 「山鳥の尾長」と「夜長」の掛 ^{かけことば} 詞
※ 山鳥は、夜になると雄と雌が谷を隔てて別々に寝るといわれている
※ 掛 ^{かけことば} 詞とは、同じ音、あるいは類似音のことばに、二つ以上の意味を込めて表現する方法

004 田子の浦に うち出でてみれば 白妙の 富士の高嶺に 雪は降りつつ (山部赤人)
田子の浦ン海岸に出て見れば 白か雪バ頂く富士山の高嶺にゃ 雪ン降りよる
※「白妙の」は、「富士」に掛かる枕 詞 (梶の木の繊維で織った白布)

005 奥山に 紅葉踏み分け 鳴く鹿の 声聞くとときぞ 秋は悲しき (猿丸大夫)
奥山で 紅葉を踏み分けて (雌バ呼んで) 鳴きよる鹿の声を聞けば
秋はしみじみと 寂しさが感じらるっとよなあ

006 鶺鴒の 渡せる橋に 置く霜の 白きを見れば 夜ぞふけにける (中納言家持)
鶺鴒が橋バ掛くると言われる 天の川ン橋のごて見立てらるる 宮中の御橋に
白か霜ンおりとっとバ見れば 夜もだいぶん 更けよるばいなあ

007 天の原 ふりさけ見れば 春日なる 三笠の山に 出でし月かも (安倍仲麿)
天空を 振り仰いで眺むれば、あん月はたしきや 春日の三笠山に出ていた
月と同じ月じゃろうでネ 懐かしか ※「天の原」は、「ふりさけ見る」に掛かる枕 詞
※ 安倍仲麿は唐へ渡り 玄宗皇帝に仕えた

008 わが庵は 都のたつみ しかぞすむ 世をうち山と 人はいふなり (喜撰法師)
私の庵は 都の東南で 鹿が棲む心静かな所で 暮らしよつとに
世を住みづらく思うて 宇治山に隠遁しとると 人達や噂しとるそうにある
※「宇治山」と「憂し山」の掛 詞

009 花の色は 移りにけりな いたづらに 我身世にふる 眺めせしまに (小野小町)
花の色はすっかりあせてしもた 雨ン降りよつとを 眺めながらしみじみ思う
我が身も そん花の色ンごて 衰えてしもたばい
※ 花の命と容姿が衰えてゆく我が身の哀愁を重ね合わせた
※「眺めせしまに」は、「長雨」と「眺める」の掛 詞
※ 小野小町(絶世の美女)は、在原業平に密かに思いを寄せていたといわれている

010 これやこの 行くも帰るも 別れては 知るも知らぬも 逢ふ坂の関 (蝉丸)
これがあの有名な 東国へ行く人も 京に帰る人も
知つとる人も 知らン人も ここで別れてもまた逢えるて
言われとる 逢坂の関たあ まこてー



011 わたの原 八十島かけて 漕ぎ出でぬと 人には告げよ あまのつりぶね (参議篁)
「大海原の多くの島々目指して 舟で漕ぎ出して行ったばい」ちゅて
都の人たちに 知らせてくれナ 釣り舟に乗つとる人たちヨィ

※ わたの原（大海原）

※ 参議さんぎのたかむら 篁おきは隠岐に流罪になった

012 天つ風 雲のかよひ路 吹きとぢよ 乙女の姿 しばしとどめむ（僧正遍昭）

空を吹く風よい どうか雲の中の天女が通う道を 塞さいでくれい
乙女たちの姿を もうしばらく 引き留とどめめておきたかけん

013 筑波嶺ねの みねより落つる みなみなのがわの川 恋ぞつもりて 淵となりぬる（陽成院）

筑波の嶺から落流する男女川は わずかな流れが積り積もって深い淵になつとよネ
私の恋心も 密かな思いが 深い思いになったとヨ

※「落つる」 天草方言「落つる」

014 陸奥みちのくの しのぶもぢずり 誰ゆゑに 乱れそめにし 我ならなくに（河原左大臣）

陸奥のしのぶもじずりのごて 誰のせいでわたしの心は思い乱れていると思うネ
みんなあなたのせいばい ※ しのぶもぢずり（乱れ模様の染物）

015 君がため 春の野にいでて 若菜摘む わが衣手に 雪は降りつつ（光孝天皇）

あなたに差し上ぎゅうどもて 春の野に出て若菜を 摘んどったりゃ
雪がちらちら降ってきて 私ン着物の袖に降りかかったとヨ

016 立ち別れ いないなばのくにばの山の 峰いに生ふる まつとし聞かば 今帰来む（中納言行平）

あなたと別れて わたしは因幡国（鳥取県）さん 行くばって
稲葉山の峰に生えとる松のごて（あなたをマツのも マツのうち）
あなたが待ちこがれていると聞けば たった今でん 都さん とんで帰るバイ

※「松」と「待つ」の掛かけことば詞

017 ちはやぶる 神代もきかず 竜田川 からくれなゐに 水くくるとは（在原業平朝臣）

神代の昔でも 聞いたこともなか 竜田川一面に紅葉が散りばめられ
美しか唐紅色のくくり染めんごて 見ゆるなんちゅうことは

※「ちはやぶる」は、「神」に掛まくらことばかる枕詞 ※「からくれなゐ」は中国伝来の鮮やかな紅色

018 住の江の 岸に寄る波 よるさへや 夢のかよひ路 人目よくらむ（藤原敏行朝臣）

住の江の岸に寄る波の「よる」じゃなかばって 夜でっちゃ
夢の中の恋人が通う道でっちゃ あなたはどい人目を はばからすとじゃろかい

※「寄る」と「夜」の掛かけことば詞

019 灘波なにはがた潟 短かき芦の 節の間も 逢はでこの世を 過ぐしてよとや（伊勢）

灘波潟（大阪付近）の入江に生っている芦の 短か節の間ごて ほんの短い間でも
お会いできんままに いつまでもこの世を過ごせ ちゅうとね ひどかね

020 わびぬれば 今^なはた同じ 灘^な波^はなる 身をつくしても 逢^あはむとぞ思^{おも}ふ (元良親王)

こがんわびしか思いをしとれば 今^なはもうどうなってもよか

いっそ あの灘^な波^は湯^たの「みをつくし」ということばのごて

この身をつくしてもよか 今^な一度 あなたにお逢^あいしたかー

※「みをつくし」は、「身を尽くして」と「漕^み標^お」(船の道しるべ)の掛^{かけ}詞^{ことば}

021 今^な来^きむと いひしばかりに 長^{なが}月の 有^あ明^{めい}の月^{つき}を 待^{まち}出^いでつるかな (素性法師)

「今^なじき会^あいに来^きる」て おっしゃったけん そのおことばを信^{しん}じて

九^く月^{げつ}の長^{なが}夜^やを待^{まち}続^つけたりゃ とうと夜^よの明^あけて 有^あ明^{めい}の月^{つき}が^で出^いてしもたとヨ

(齒^は痒^かかネもう…) ※ 有^あ明^{めい}の月^{つき} (夜^よ明^あけまで残^{のこ}っている月^{つき})

022 吹^ふくからに 秋^{あき}の草^{くさ}木^きの しを^しるれば むべ山^{やま}風^{かぜ}を あらしといふらむ (文屋康秀)

風^{かぜ}が吹^ふきおろして 秋^{あき}の草^{くさ}木^きはしおれてしまう

なるほど だけん 山^{やま}から吹^ふきおろす風^{かぜ}を「嵐^{あらし}」(荒^あらし) ちゅうとばいネ

※「荒^あらす」と「嵐^{あらし}」の掛^{かけ}詞^{ことば}

023 月^{つき}見^みれば ちちに物^{もの}こそ 悲^{かな}しけれ わが身^みひとつの 秋^{あき}にはあらねど (大江千里)

秋^{あき}の月^{つき}を眺^{なが}めとれば 様^{よう}々な思^{おも}いに心^{こころ}が乱^{みだ}れて 悲^{かな}しみが押^おし寄^よせてくる

秋^{あき}は 私^{わたし}ひとりのためだけに やってきた訳^{わけ}じゃなかとばって

※ ちちに (色^{いろ}々 様^{よう}々の意^い)

024 このた^たびは 幣^{ぬさ}もと^とりあへず 手^た向^む山^{やま} 紅^{べに}葉^はのにしき 神^{かみ}のまにまに (菅家)

今^な度^どの旅^{たび}は 幣^{ぬさ}を用^{もち}意^いするひまもござっせんで

手^た向^む山^{やま}の神^{かみ}さま とりあえず こん美^うし^たか紅^{べに}葉^はを 幣^{ぬさ}としてお供^{とも}えします

どうか神^{かみ}様の 心^{こころ}のままに お受^うけくだっせ ※ 幣^{ぬさ} (神^{かみ}に供^{とも}える 御^ご幣^{へい})

025 名^なにし負^おはば 逢^あう坂^{さか}山^{やま}の さねかづら 人^{ひと}に知^しられで くるよしもがな (三条右大臣)

名^な前に持^もつ「逢^あうて共^{とも}寝^ねする」ちゅう 逢^あう坂^{さか}山^{やま}のさねかづら^らんごて 葛^{くわ}をたぐって

こっそりあなたの側^{そば}に 逢^あいに^い行く方^{かた}法^{ぽう}は なかろかネ

※「さねかづら」と「共^{とも}寝^ね」の掛^{かけ}詞^{ことば} (モクレン科^かのつる状^{じょう}灌^{かん}木^{ぼく})



026 小^こ倉^{くら}山^{やま} 峰^{みね}の紅^{べに}葉^はば 心^{こころ}あらば 今^なひとた^たびの みゆき待^{まち}たなむ (貞信公)

小^こ倉^{くら}山^{やま}の峰^{みね}を美^うしく彩^{いろ}る紅^{べに}葉^は葉^はよい もしお前^{まへ}にも物^{もの}のあわれのわ^わかる心^{こころ}があれば

もう一度 天^{あま}皇^みがこ^ここさん いらっしやる時^{とき}まで 待^{まち}とってくれんかい

(そがん 散^ちり急^{いそ}が^んちゃ)

027 みかの原^{はら} わきて流^{なが}るる いづみ川^{がわ} いつ見^みきとてか 恋^{こい}しかるらむ (中^{ちゆう}納^{なつ}言^{げん}兼^{けん}輔^{すけ})

みかの原^{はら}を分^わけて 湧^わいて流^{なが}るるいづみ川^{がわ}よい そんいづみ川^{がわ}の名^なのごて

その人を「いつ見」たちゅうただけで 私ゃその人を 恋しく思うてしまうと

※「湧きて」と「分けて」の掛詞かけことば ※「いづみ」と「いつ見」の掛詞かけことば

028 山里は 冬ぞさびしさ まさりける 人目も草も かれぬと思へば (源宗于朝臣)

山里の暮らしは 冬はことにさびしさが 身にしみて感じらるる

訪ねてくる人も途絶え 草も枯れ果ててしまうと思えば

029 心あてに 折らばや折らむ 初霜の 置きまどはせる 白菊の花 (凡河内躬恒)

もし当てずっぽうに折れば 折られんこともなかるばって

初霜が一面に まっ白において 霜か白菊の花か 見分けンつかん

030 有明の つれなく見えし 別れより 暁ばかり 憂きものはなし (壬生忠岑)

夜明けの空に 有明の月が つれなく残った

あなたと別れてから お会いすることもなく 長い年月がたってしもたばって

私には今でも、有明の月のかかる 夜明けほど 辛く嫌なものはなかとヨ

031 朝ぼらけ 有明の月と 見るまでに 吉野の里に 降れる白雪 (坂上是則)

ほのぼのと夜が明ける頃 あたりを見わしたりゃ

まるで 有明の月光がさしとるごとで思われて

まっ白う こん吉野の山里に 降り積もっている白雪ヨィ

032 山川に 風のかけたる しがらみは 流れもあへぬ 紅葉なりけり (春道列樹)

山の谷川に、風に吹き散らされたまん しがらみは

流れきらでにゃおる 紅葉じゃったっぞ

※ しがらみ (川の流れを塞ぎ止めるため竹や柴で造られた柵)

033 久方の 光のどけき 春の日に しづ心なく 花の散るらむ (紀友則)

うららかな 日の光が降り注ぐ のどかな春の日じゃって

桜の花は どい おちついた心もなく あわただしゅう 散っとじゃろかい

(こんよか春日和に うろたえて 散らんちゃ よかろでま)

※ 「久方の」は、「天・月・光・雨」に掛かる枕詞まくらことば

034 誰をかも 知る人にせむ 高砂の松も 昔の友ならなくに (藤原興風)

友人ナみんな死んでしもた これから いったい誰を知人友人にしゅうかい

高砂の松っちゃ 昔からの友達じゃなか ※ 高砂の松 (兵庫県高砂市 松の名所)

035 人はいさ 心も知らず ふるさとは 花ぞ昔の 香ににほひける (紀貫之)

あなたのお心は 昔のままじゃいろ ようわからんばって

この初瀬の里の 梅の花は 昔どおりの香りで 美しゅう咲いとるヨ

036 夏の夜は まだ宵ながら 明けぬるを 雲のいづこに 月宿るらむ (清原深養父)

夏の夜は まだ宵だと思っている内に もう明けてしもた
こがん早う 夜が明けたばって いったい雲はどけ 宿ったったっじゃろかい

037 白露に 風の吹きしく 秋の野は つらぬきとめぬ 玉ぞ散りける (文屋朝康)

白霧が降りとる 秋の野に 朝風がしきりに 吹き寄せるたびに
糸につなぎてなか 水晶玉が 散りこぼれとるごて見ゆる

038 忘らるる 身をば思はず 誓ひてし 人の命の 惜しくもあるかな (右近)

あなたに忘れられることは 私にとっては 何でもなかばって
私バ愛して下さると 神にお誓いになった あなたの命が 神様の罰を受けて
縮んでしまうのが 心配でならんとヨ

039 ^{あさしぶ}浅茅生の 小野の篠原 しのぶれど あまりてなどか 人の恋しき (参議等)

^{ちがや}茅ン生えとる 小野の篠原 その「しの」という ことばンごて
忍んでも 忍びきらんごて どいこがん あなたが恋しかっじゃいろ

040 忍ぶれど 色に出でにけり わが恋は 物や思ふと 人の問ふまで (平兼盛)

あの人を恋しく思う気持ちを 人に知られんごて 長い間包み隠しとったばって
とうと かくしきれでにゃ 顔色に出てしもた 人ンたんねるごて

041 恋すてふ わが名はまだき 立ちにけり 人知れずこそ 思ひそめしか (壬生忠見)

あの人を恋しとる という噂が、もう人たちに広まってしもとる
人に気づかれんごて ひそかに思いを 寄せとったっじゃって

042 契りきな かたみに袖を しぼりつつ 末の松山 波こさじとは (清原元輔)

約束したもんネ お互いに涙で濡れる袖を しぼりながら
あの末の松原を 決して波が越すこたなかごて 二人の愛も永遠に変わらんちゅて

043 逢ひ見ての 後の心に くらぶれば 昔は物を 思はざりけり (権中納言敦忠)

お会いした後の はげしか恋心に比ぶれば 昔 思うとった頃ン
恋の辛さなんか 何の物思いもせんにと 同じごたるもんじゃった

※ 「比ぶる」 天草方言「比ぶる」

044 逢ふことの 絶えてしなくば なかなかに 人をも身をも 恨みざらまし

(中納言朝忠)

会って 愛し合うことが 一度もなかったンなら
かえって あなたのことも 私自身を恨むことも なかったろで

045 哀れとも いふべき人は 思ほえで 身のいたづらに なりぬべきかな (謙徳公)
「見すてられて気のどくに」ちゆて 同情してくるる人も ありそうになか
このまま私ゃ むなしく 死んでいくちゃろネ

046 由良の門を 渡る舟人 かちを絶え ゆくへも知らぬ 恋の道かな (曾禰好忠)
由良の瀬戸を こぎ渡る船頭が 權バなくして 行く先もわからん
あの小舟ンごて 私の恋のゆくえも どがんなるか わかりゃせん

047 八重むぐら しげれる宿の さびしきに 人こそ見えね 秋は来にけり (恵慶法師)
雑草が幾重にも生い繁っとる こがん荒れはてた屋敷にゃ 誰も人は訪ねて来ん
そっちゃ秋は 忘れてにゃ やって来っとネ

048 風をいたみ 岩うつ波の おのれのみ ぐだけて物を 思ふころかな (源重之)
風がはげしゅう 岩にうちつけ 波がぐだけ散って しまうごて
あなたが つれなかけん 苦しか恋の思いに 心がぐだけ散る コン頃た

049 みかき守り 衛士のたく火の 夜はもえ 昼は消えつつ 物をこそ思へ
おおなかとみよしのぶあそん
(大中臣能宣朝臣)
宮中を守る衛士が たくかがり火は 夜は赤あかと燃え 昼は消えとるごて
(私の恋の炎も 夜は燃え上がり 昼は身も消え入らんばかり 思い悩んどっとヨ)

050 君がため 惜しからざりし 命さへ 長くもがなと 思ひけるかな (藤原義孝)
あなたと お会いするためなら たとえ捨てても惜しくなかつ命て 思うとったばって
こうしてお会いできた今は あなたともっといつまっでん 生きていたかて思うとヨ

051 かくとだに えやは伊吹の さしも草 さしも知らじな もゆる思ひを
(藤原実方朝臣)
私の恋心はこがんで言いきらんとだけん ましてや伊吹山のさしも草が燃ゆるごて
私の思いの火が こがんも激しゅう 燃えとつとは あなたは知らんど もん
※ さしも草 (お灸の原料) 「お灸の熱さ」と「燃える心の熱さ」

052 明けぬれば 暮るるものとは 知りながら なほ恨めしき 朝ぼらけかな
(藤原道信朝臣)
夜が明ければ やがて日が暮るる また逢えるとわかっっても
やはり あなたと別れる 夜明け方は うらめしゅう思うとばい

053 嘆きつつ ひとり寝る夜の 明くる間は いかにかしき 物とかは知る

(右大将道綱母)

さびしゆして 嘆き哀しみながら 一人寝で過ごす夜は 夜が明けるまでの時間が
どがん 長う感じらるるもんか あなたは きっとご存じなかでしよネ

※ 「寝る」は「寝る」 天草方言「ぬる」

054 忘れじの 行く末までは かたければ 今日を限りの 命ともがな (儀同三司母)

いつまでも忘れまいと おっしゃるばって 将来も変わらんということは難しか
いっそんこて 今日を最後に 私の命が終わってほしか

055 滝の音は たえて久しく なりぬれど 名こそ流れて なほ聞えけれ

(大納言公任)

滝の流れが絶えて 水音が聞こえんごてなってから もう何年もたったばって
昔は素晴らししか滝じゃった ちゅう評判は 今もなお伝え聞いとる

056 あらざらむ この世のほかの 思ひ出に いまひとたびの あふこともがな

(和泉式部)

私はもうすぐ この世におらんごてなる かもしれんけん あの世に逝った後でん
この世の思い出に せめてもう一度 あなたにお会いしたかとヨ

057 めぐりあひて 見しや夫とも わかぬまに 雲がくれにし 夜半の月かな

(紫式部)

久しぶりに会うたるとに 何もはつきりせんうちに 雲に隠れてしもた
夜中の月ンごて (まだいっしょに 居りたかったて じき帰ってしもて もう)

058 有馬山 猪名の笹原 風吹けば いでそよ人を 忘れやはする (大式三位)

有馬山のそばの 猪名の笹原に風が吹けば 笹ン葉がそよそよと鳴るごて
そうよ あなたを どうして 忘れたりするもんネ

059 やすらはで 寝なましものを 小夜ふけて かたぶくまでの 月を見しかな

(赤染衛門)

おいでにならんとなろば ためらわでにゃ 寝てしもたとに
あなたを待ち続け とうとう月が 西の山に傾くまで 眺めとったとヨ

※ 「かたぶく」 天草方言「かたぶく・かたびく」

060 大江山 生野の道の 遠ければ まだふみも見ず 天の橋立 (小式部内侍)

大江山を越え 生野に行く道は あまりに遠かけん まだ天橋立は
足を踏み入れたこともなかし そこに住む母からの文 (手紙) もまだ見とらんと

※「ふみも見ず」は、「踏み」と「文」の掛詞かけことば

061 いにしへの 奈良の都の 八重桜 今日九重けふに にほひぬるかな (伊勢大輔)
昔の奈良の都で咲き誇った八重桜が 今 宮中で美しゅう咲き誇るとる

062 夜をこめて 鳥のそらねは はかるとも よに逢坂おっさかの 関はゆるさじ (清少納言)
夜の明けんうちに 鶏の鳴き声をまねて だまそうと謀ったっちゃ
あん中国かんこくかんの函谷関おっさかなる 通らるっどばって 私の逢坂おっさかの関は 決して開かんヨ
(逢いたかちゆても アイ.マ.セン)

※「そらね」 天草方言「そらね」(寝たふり・声色真似)こわいろ

063 今はただ 思ひ絶えなむ とばかりを 人づてならで いふよしもがな
(左京大夫道雅)
今はもう あなたのことは きっぱりあきらみゆばいて 決めたばって
それだけを 人づてでなく直接 あなたに伝える方法が あればネエ
(せめて もう一度 あなたに会いたか)

064 朝ぼらけ 宇治の川霧 たえだえに あらはれわたる 瀬々の網代木あじろ
(権中納言定頼)
ほのぼのと夜の明くるころ 宇治川に立ちこめた川霧が
とぎれて しだいに川面に現れてくる 浅瀬あじろに仕掛けられた 網代木ヨイ

065 恨みわび ほさぬ袖だに あるものを 恋くに朽ちなむ 名こそ惜しけれ (相模)
あなたの冷たさを恨み 流す涙で 乾くひまもなか 袖でさえ
朽ちずに残とつとに この恋のために つまらんうわさをたてられ
私の評判が 落ちつとは なんと口惜しかこと

066 もろともに あはれと思へ 山桜 花よりほかに しる人もなし (前大僧正行尊)
お前を懐かしく思うごて お前も私を懐かしゅう思うてくれ 山桜よい
こが山奥でにゃ 桜の花ンお前の他にゃ 私の心を 知る者ナ誰もおらんと

067 春の夜の 夢ばかりなる手枕に かひなく立たむ 名こそ惜しけれ (周防内侍)
春の夜の はかなか夢ンごて たわむれに あなたの腕枕をしたりすれば
つまらん評判が立つことじゃろだ それが本当に残念じゃん

068 心にも あらでうき世に ながらへば 恋しかるべき 夜半よはの月かな (三条院)
心からの願いでもなか つらいこの世を 生きながらえたるば
この宮中で見た 夜の月が 恋しゅう 思い出さるることじゃろだ

069 嵐吹く み室の山の ^{ちみじば}紅葉葉は 竜田の川の 錦なりけり (能因法師)
嵐が吹きちらした 三室の山の 紅葉の葉が 龍田川の川面に散り
まるで 錦織のごて美しか

070 さびしさに 宿を立ち出でて ながむれば いづくもおなじ 秋の夕ぐれ
(良選法師)
あまりの寂しさに耐え切れず 庵を出てあたりを 眺めて見たばって
なるほど どこも同じたあ こん秋の夕暮れの もの寂しかこつが

071 夕されば 門田の稲葉 おとづれて 芦のまろやに 秋風ぞ吹く (大納言経信)
夕方になれば 家の前ン田の稲葉を そよ吹く風が 音をたてて訪れとる
^{あしひ}芦葺きの そまつな小屋に 秋風ン吹いてくるばい
※「夕され」 天草方言「よさり」

072 音に聞く 高師の浜の あだ波は かけじや袖の ぬれもこそすれ
(祐子内親王家紀伊)
うわさに聞く 高師の浜の波のごて 風もなかとに 立つ波のごて
あなたの浮気なことばに 思いをかけることも しゅうみゃ
涙で 袖が濡るっと困るけん

073 高砂の ^{おのえ}尾上の桜 咲にけり ^{とやま}外山のかすみ 立たずもあらなむ (前権中納言匡房)
高い山の峰にも 桜が咲いたばい 人里に近か外山の霞よい
桜が見えんけん どうか立たんでくれい
※「高砂の」は、「尾上」に掛かる枕 ^{まくらことば}詞

074 憂かりける 人を初瀬の 山おろしよ はげしかれとは 祈らぬものを
(源俊頼朝臣)
私に冷たかった人を 初瀬の山おろしの風よい (お前ンごて あの人の冷たさが)
いっそう激しくなれとは 祈らんじゃったとに

075 契りおきし させもが露を 命にて あはれ今年の 秋もいぬめり (藤原基俊)
あなたが約束してくれらした させも草についた露のごて
あなたの言葉を 命ともて 大切にしてみましたばって
それもむなしゅう 今年の秋も 過ぎ去ってしまいそうにある

076 わたの原 漕ぎ出でて見れば 久方の 雲みにまがふ 沖つ白波 (法性寺入道)
海原に船を漕ぎ出して見わたせば 遠くん方でにゃ 白か雲と見わけノつかんごたる
沖の白波ノ 立ととつが見ゆる

※ 「久方の」は、「天・月・光・雨・雲」に掛かる枕詞まくらことば

077 瀬を早み 岩にせかるる 滝川の われても末に あはむとぞ思ふ (崇徳院)

川の浅瀬で岩にせき止められた急流が 一旦は分かれても 下流で一つになるごと
私達も今は人に邪魔されても 将来はきっと結ばりゅうと思うとった

078 淡路島 通ふ千鳥の なく声に 幾夜寝ざめぬ 須磨の関守 (源兼昌)

淡路島から通うてくる 千鳥が悲しげに鳴く声に 幾夜 目を覚ましたことじゃいろ
こん須磨の関の番人ナ

079 秋風に たなびく雲の 絶え間より もれ出づる月の 影のさやけさ

(左京大夫顕輔)

秋風に吹かれて たなびいとる 雲の切れ間から もれ出てくる月の光の
なんと 明るく清らかに 澄みきとることか

080 長からむ 心もしらず 黒髪の 乱れて今朝は ものをこそ思へ (待賢門院堀河)

あなたの愛が長く続くかどうか あなたの心もわからでにゃ 別れた今朝は
私の黒髪が 寝乱れとるごと 心も乱れて 物思いにしずんどっと

081 ほととぎす 鳴きつる方を 眺むれば ただ有明の 月ぞ残れる

(後徳大寺左大臣)

ほととぎすの鳴き声ン する方角を眺むれば その姿はもう見えでにゃ
ただ 明け方の月が 残とるだけじゃった

082 思ひわび さても命は あるものを 憂うきにたへぬは 涙なりけり (道因法師)

つれなかなのこを 思い悩んどつても それでも死にもせんで
命は何とか取り留めとつとに 辛さに耐え切れず 流れてしまうのが涙じゃっかね

083 世の中よ 道こそなけれ 思ひ入る 山の奥にも 鹿ぞ鳴くなる

(皇太后宮大夫俊成)

世の中というものは 逃れる道はなかもんばいな
山の奥でも辛かことン あったっじゃいろ 雌を慕う鹿が 寂しく鳴きよるばい

084 ながらへば またこの頃や しのばれむ 憂うしと見し世ぞ 今は恋しき

(藤原清輔朝臣)

もし生きながらえたらば 辛かことの多か今のことが 懐かしく思い出さるっどか
かつては辛かと思うた昔が 今では懐かしゅう思わるっただけん

085 夜もすから 物思ふころは 明けやらで 闇^{ねや}のひまさへ つれなかりけり
(俊恵法師)

一晚中 恋人のことで思い嘆いとるこの頃は なかなか夜が明けなくて
朝の光が射し込んで こん寝室の隙間まで 無情に感じらるっとヨ

086 嘆けとて 月やは物を 思はするか こち顔なる わが涙かな (西行法師)

嘆き悲しめちゅうて 月は私に物思いをさすっとじゃろか
まるで月のせいでもあるかのごて恨みがましゅう 流るる私の涙じゃろう まこて

087 村雨の 露もまだひぬ 真木の葉に 霧立ちのぼる 秋の夕ぐれ (寂蓮法師)

にわか雨が残した露も まだ乾ききっていない 真木(杉・桧)の葉に
もう霧がたちのぼっている ものさびしか 秋の夕暮れじゃネ

088 難波江の 芦のかりねの ひとよゆえ みをつくしてや 恋ひわたるべき

(皇嘉門院別当)

難波の入江に生えている芦を かった根の一節のごたる 短か旅の一夜バ
あなたと寝たばかりに 私は一生 この身をささげつくして
あなたを 恋せんばならんとじゃろかい

089 玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば 忍ぶることの 弱りもぞする

(式子内親王)

私の命よ絶えるなら絶えてほしい このまま 生きながらえとれば
胸の思いをこらえて 耐えている力が弱うなって
秘めている思いが 世間に知られてしまうかも知れんけん

※ 「玉の緒の」は、「絶える・長い」に掛かる枕^{まくらことば} 詞

090 見せばやな 雄島のあまの 袖だにも 濡れにぞ濡れし 色はかはらす

(殷富門院大輔)

お見せしたかよ(悲しみの涙に濡れて 変色した私の袖を)
あん雄島の漁夫の袖っちゃ いくら濡れても いっちょん 色落ちせんちゅうとに

091 きりぎりす 鳴くや霜夜の さむしろに 衣かたしき ひとりかも寝む

(後京極摂政)

こおろぎがしきりに鳴いとる 霜のおりとる こん寒々としたむしろの上に
私は 着物の片方の袖を敷いて 一人寂しく 寝んばんとじゃろかい

092 わが袖は 潮干^{しおひ}に見えぬ 沖の石の 人こそ知らね かわく間もなし

(二条院讃岐)

私の袖は 潮が引いた時も見えん 沖の石のごて 人には見えんどだ
あの人を 思う恋の涙に濡れて わずかの間っちゃ 乾くひまんなかとヨ

093 世の中は 常にもがもな 渚こぐ あまの小舟の 綱手かなしも (鎌倉右大臣)
世の中はいつまでも変わらんでほしかもんばい 渚にそって漕ぐ
漁師の小舟にかけて 陸から引いていく綱の様子は なんと物悲しか情景ばい

094 み吉野の 山の秋風 さ夜ふけて ふるさと寒く 衣うつなり (参議雅経)
吉野の山から吹く秋風に しだいに夜も更けて 古い都があったこの里のあたりにゃ
衣きぬたバ織る砧ひとしおの音が 一入 寒々と身にしみて 聞こえてくるばい

095 おほけなく うき世の民に おほふかな わがたつそま杣に 墨染の袖
(前大僧正慈円)
身の程知らず ちゅわるるかも知れんばって この辛い浮き世の人たちバ
覆い包んでやろうだ 比叡山に住み始めたこの私が 黒染めの袖で

096 花さそふ 嵐の庭の 雪ならで ふりゆくものは わが身なりけり
(入道前太政大臣)
桜ン花が散るとばさそうごて 嵐が吹く庭は「降りゆく」ごて 花吹雪が舞いよる
ばって「古りゆく」とは桜の花じゃなか 本当はこの年老いた 私ばいなあ
※「降りゆく」と「古りゆく」の掛かけことば詞

097 こぬ人を まつほの浦の 夕なぎに 焼くやもしお藻塩の 身もこがれつつ
(権中納言定家)
いくら待っても来ん恋人を 毎日毎日待ちこがれている私は
あの松帆の浦で夕なぎの頃 焼くちゅう藻塩のごて
燃え盛る恋の思いに 焼かれて身もこがれるほど 苦しゅうどっとヨ

098 風そよぐ ならの小川の 夕ぐれは みそぎそ夏の しるしなりける
(従二位家隆)
そよ吹く風にナラの葉がそよげば この「奈良の小川」あたりの夕暮れは
もうすっかり秋の気配ばって あの六月みなつきばらえ祓のみそぎ行事だけが
まだ夏の印じゃろだなあ ※「ナラの葉」と「奈良」の掛かけことば詞

099 人も惜し 人も恨めし 味気なく 世を思ふゆえに 物思ふ身は (後鳥羽院)
人をいとおしくも思い 人を恨めしゅう 思ったりしてしまう
世の中は味気のうして思い通りにならんし つまらんで思うもんだけん

100 ももしきや ふるき軒ばの しのはにも なほあまりある 昔なりけり (順徳院)

御所の荒れた軒端に生えとる しのは草を 見るにつけても

朝廷の栄えた昔が 懐かしゅう思われて いくら思んでも 思ひきらん位^{くりや}あ

懐かしかとは 昔の良か時代じゃなあ

※「シノブ草」と「思ひ」の掛詞^{かけことば}

※「ももしき」は、「大宮人」に掛かる枕詞^{まくらことば} 「百敷」「百石城」(御所の意)

[トップページへ戻る](#)